

市場構造に基づく対外援助競争に関する分析

A tentative analysis of foreign aid competition based on market structure

要旨

静岡県立大学 (University of Shizuoka) 飯野光浩 (Mitsuhiro Iino)

日本政府は、2015年2月に開発協力大綱を閣議決定した。これに基づき、政府は低所得国である途上国のみならず、中所得国や高所得国にも援助を提供している。もちろん、日本を含む先進国、いわゆる OECD-DAC (Development Assistance Committee、開発援助委員会) 諸国のみが援助を提供しているわけではない。途上国が別の途上国を支援する南南協力は活発に行われており、ベトナムやタイの援助はこの例となる。中国やインドなどの新興国も途上国に巨額の資金を援助している。

援助の世界で新興・途上国が台頭して、存在感を増している。まさに、対外援助競争の様相を呈している。そのため、DAC 諸国と非 DAC の新興・途上国の間で摩擦が起こっている。DAC 諸国は援助に関してルールを定めており、そのルールに従って援助をしているが、非 DAC 諸国である中国などの新興・途上国はそのルールに縛られることなく、援助をしている。特に、非 DAC 諸国が、ガバナンスの質が悪い国にも援助していることが、DAC 諸国から強く指摘されている。

この論文では、このような状況を市場構造の観点から分析する。援助競争をある 1 国の援助受取国に $n+1$ 国の援助提供国が援助すると捉える。援助は援助提供国によって生産される財・サービスと考える。そして、援助受取国は $n+1$ 国から得た援助財・サービスを必要しているとする。つまり、援助は提供国により援助から得られる収入と費用の差である利潤を最大にするように生産されるとする。

$n+1$ 国の提供国が同じ目的関数 (自国の援助から得られる利潤) のもとで、クールノー・ナッシュ競争をしている場合とシュタッケルベルグ競争をしている場合を考察する。次に、受取国政府のガバナンスに問題があり、援助を含む政府予算の一部が開発に回らず **rent-seeking** されている状況を考える。さらに、 $n+1$ 国の提供国のうち、1 国がこの受取国の **rent-seeker** の目的関数を含めた自分の目的関数を最適化する行動を取るとする。つまり、**mixed oligopoly** の要素を導入したモデルを構築して、提供国間の競争が援助量に及ぼす効果を分析した。

主な結論は以下の通りである。**rent-seeking** と **mixed oligopoly** がある場合の各国の援助量を比較すると、**rent-seeking** の程度が高いとき、**rent-seeker** の目的を考慮して援助している 1 国の援助量は他の n 国の援助量よりも大きくなる。**rent-seeking** と **mixed oligopoly** がある場合とない場合の各国の援助量を比較すると、**rent-seeking** の程度が高いとき、**rent-seeker** の目的を考慮して援助している 1 国の援助量はある場合の方が多くなり、他の n 国の援助量はない場合の方が多くなる。この 1 国を中国などの新興ドナー、 n 国を DAC ドナーとすると、中国などの新興ドナーが、援助における存在感を高めるために、ガバナンスの質の低い国に、その国の関係者と結びついて支援していることを示している。